ベルトルト・ブレヒト著、谷川道子訳
『母アンナの子連れ従軍記』
光文社古典新訳文庫　二〇〇九年八月

本書は、ドイツ現代演劇の旗手ベルトルト・ブレヒト（一八九八―一九五六年）が、亡命中の一九三九年に著した作品の、谷川道子氏による新訳である。

舞台は、三十年戦争中期、スウェーデン、ポーランド、及びドイツ全土を含む中欧（ミッテルオイローパ）である。三十年戦争（一六一八―四八年）とは、プラハ城における帝国役人の窓外放擲事件に発端し、神聖ローマ帝国を主役、そして中欧を主たる舞台として展開した、最初の「国際戦争」である。類似の戦争として、盛期中世の十字軍や、中世後期の英仏百年戦争が想起されるが、それらと同戦争の間には決定的な違いがある。それは、宗派という参戦大義と、主権国家なる参戦単位の出現である。

『従軍記』は一六二四年春、スウェーデンから始まり、一六三五年のバイエルンで終わる。確かに三十年戦争が物語に時空上の舞台を提供しているが、そこでは国家意志も、宗教的大義も、どこか緊迫感のない書割、あるいは戯画的遠景にすぎない。物語はむしろ、母アンナが娘カトリンと引き続ける「幌車」を、そのすぐ傍で見守る視線で語られる。戦争という不条理な状況の下で、子供たちへの愛情だけを糧に逞しく生き抜くアンナの姿は、この位置だからこそ実に生々しい。生きる希望――愛娘カトリン！――を次々と奪われていくアンナに、すぐ傍に居ながら手を差し伸べることもできない。胎内から我が子を引き剥がされていく、母の喪失感。それでも幌車を引いていくアンナの気丈。胸引き裂かれる思いが、読者の心に残される。

ブレヒトが底本としたのは、三十年戦争後半の現実を生きたグリンメルスハウゼンの『放浪女ペテン師クラッシェ』（一六七〇年）であるという。この主題の舞台が三十年戦争に設定されたことには、幾重もの理由が存在する。本作の執筆は一九三九年、亡命先のスウェーデンであった。黄金のワイマール・ベルリンにあって才能を開花させ、演劇人として至福の時を謳歌していたブレヒトは、一九三三年のナチス政権掌握後、ユダヤ人の妻、子供たちと共に、プラハ、ウィーン、チューリヒ、デンマークと、祖国を離れヨーロッパじゅうを転々とした。国家という怪物が繰り広げる近代戦争の不条理に翻弄されながらも、抗い立ち向かうブレヒト一家の姿は、まさにアンナの幌車に重ね合わされる。

ブレヒト出生の町アウクスブルクは、宗教改革期の宗派対立、宗派戦争にあって、「宗派は領邦が定める」（cujus regio, ejus religio）という標語で知られる宗教和議（宗教平和令）が発布された町である。ブレヒトの父がカトリック、母がプロテスタントであるという事実は、両宗派共存（ビコンフェシオネール）を早くに実現したこの町の歴史に遠く淵源している。だからこそ、宗教的寛容の精神に背信する三十年戦争の似非（えせ）宗派主義は、従軍牧師役の風見鶏的な

振舞いを通じて、劇中、幾度となく揶揄されている。

歴史家として、評者が本作品の演劇としての評価や演出面の領域に踏み込むことは技術的に困難であり、それは本書収録の訳者解説に譲りたい。一つだけ、歴史的観点から指摘できるとしたら、それはブレヒトがヴァルター・ベンヤミンらと立ち上げた「ブレヒト工房」のような、近代知を超克していく学際的サークルが、ワイマール期のドイツ語圏に、同時多発的に発生した怪奇である。カバラ研究者ゲルショム・ショーレム、心理学者ジグムント・フロイト、美術史家アビ・ワールブルク、中世思想研究者エルンスト・カントローヴィチ、中世文献学者エルンスト・ローベルト・クルティウス、といった固有名詞を試みに列挙してみただけでも、ワイマール・ドイチュが持ちえた巨大な潜在能力が理解できよう。ナチズムの罪過の一つは、これらの工房群を、その多分にユダヤ的色彩ゆえに、すべて海外に流出させてしまったことにある。

『母アンナの子連れ従軍記』（『肝っ玉おっ母とその子どもたち』としても知られる）の邦訳には、伝説の演劇人でブレヒト上演者である千田是也（せんだこれや）による初訳（一九五三年）、その弟子でブレヒト研究の第一人者岩淵達治による訳業（一九九九年）がある。谷川訳はしたがって、第三の訳業となる。「訳者あとがき」にもある通り、谷川訳の端緒は、二〇〇五年秋上演の大竹しのぶ主演、栗山民也演出の「母・肝っ玉とその子供たち――三十年戦争年代記」（新国立劇場）のための翻訳台本にあった。私事になるが、この上演用のパンフレットに三十年戦争の歴史的背景を書いてほしいという依頼が、谷川先生と評者とのファースト・コンタクトであった。外語大への赴任を翌年四月に控えた秋のことだ。あれから四年の月日を、ドイツ語専攻の同僚として過ごし、間もなく先生は外大を去られる。体力的にキツイ時でもいつも元気印の道子先生は、新任で不慣れな私にとって、まさに度胸アンナその人であった。理路整然とは言えぬが、ミチコ・マシーンから発せられる神の火花のごとき言葉の数々は、ブレヒト作品の台詞のごとく、タイムラグを伴って、時には思わぬ地点に着地するコトバ、体内をいつまでも飛び回り続ける、演劇的コトバであった。この貴重な出会いを、これからも折に触れて、噛み締めることだろう。

本書は、既述のとおり、新訳である。新訳には、より正確な訳への改訳、日本語表現を現代の日本にアクチュアライズする改訳等、いくつもの意義がありうる。谷川訳にはしかし、ドイツ現代演劇を疾駆してきた演劇人＝研究者の半生が、意味をもって折り重なっている。この訳業はまさに、ブレヒトを女性という存在をかけて生きてきた訳者の、一里塚なのだ。

共感性を増したこの訳文が、現代日本を生きる若者の手元に届けられ、ブレヒトが描くアンナの生き様が彼らの人生と切り結び、意味を紡ぎ出していくことを願う。ミチコ・マニアとしては、訳者渾身の「解説」とともに、店主の鑑識眼確かな門前仲町の古書店で購入した『ハイナー・ミュラー・マシーン』（未来社、二〇〇〇年）*を、本書と合わせて読まれることを、強く推奨したい。

（千葉敏之）

*『総合文化研究』四号（二〇〇〇年）に亀山郁夫氏による書評がある。